

発達に弱さやアンバランスがあり、「育てにくさ」や「育ちにくさ」を感じる子どもたちに、保育園や幼稚園でたくさん出会います。もう一方で、「療育」と称して個別の様々な訓練やセラピーを実施する事業所が全国各地で立ち上がっています（ここで「療育」とカギカッコをつけたのは、それは本当の療育なの？と疑問符がつくからなのですが追々述べていきます）。

ちよつとでも子どもの発達に良いことなら何でもやらせてみたいと思うのは親心です。しかし、どれが子どもに合っているのかを見きわめるのは難しいことです。保育園にも入れず、子どもと二人で煮詰まった毎日を送っているママにとって、「受給者証¹⁾があれば預かってあげますよ」と言われたらとりあえずこの事業所でもお願いしたいと思う気持ちもよくわかります。でも、本当に必要な支援が受けられるでしょうか。

子どもにとって必要な支援について、乳幼児健診などで適切なアドバイスがもらえたらラッキーですが、3歳を過ぎると気軽に相談できるところが少なくなります。近年、乳幼児の療育などの支援の仕組みが変わりました。特に相談支援²⁾は、乳幼児期の療育について詳しくない事業所も計画相談を受けることができます。子どもの発達が気になり右往左往している保護者の気持ちに寄り添いながら、子どもにとって最も適切な療育を受けられるように利用計画をつくることは、長年、相談活動にかかわってきた私たちでもとても難しく、悩みながらの作業です。それなのに、わずか5年の実務経験と4日間の講習で誰でも相談支援員の認定資格がもらえる制度が変わって、本当に子どもの発達や保護者の気持ちを理解した上での利用計画になっているかという点についても心配でなりません。

「療育を必要とする子どもたち」という場合の療育とはいったいどのような内容をさすのでしょうか。療育実践は何を大切にして、子どもにどんな力をつけるのでしょうか。療育は子どもを豊かに育てます。「できる」「できない」ではなく「やってみよう」「もう一回」とキモチを育てることを様々な実践を通して実現しています。そのように育まれた子どもの変化を保護者は受けとめ、子どもへの愛情を深めていくのです。療育は、保護者にとってもこれからの長い子育てに向かうエネルギーを充電させるために必要なものです。療育の場での同じ悩みをもつ保護者との出会いはときに一生の宝になります。ひとりぼっちじゃないことを実感して保護者のたくましささえ生み出すのが療育です。

この本はこれまで実践を積み重ねてきた療育を紹介しています。保護者のみなさんには、これまでの子育てを振り返っていただきたいの思いで「子育ての根っこ」をテーマにしています。子どもや保護者の支援に携わっているみなさんには、保護者の気持ちを深く理解したサポートがどれだけ保護者を励ますか知っていただきたいのです。

子育ての根っこを太らせる

子どもが生まれるということ

命の誕生は不思議です。自然の大きな力を感じます。ママのおなかの中でエネルギーをもらって、小さな命は時間をかけて育ちます。しかし、出産までのできごとはおなかの中で見えな

1) 障害者福祉サービス受給者証のこと。

2) 障害児相談支援。市町村に障害福祉サービスを申請した障害児について、指定事業者がサービス利用計画の作成、その後の利用計画の見直しを行うものです。